

平成25年度

第1回宮城県がん対策推進協議会
(平成25年8月8日)

「小児がん対策について」

東北大学病院小児科
呉 繁夫

小児がんの特徴

- ・「がん」の特徴
- ・「小児」が罹患することの特徴

2

小児がん

<定義>

14歳以下のこどもが罹患する全ての新生物

<罹患率>

毎年、小児10万人あたり約10名が罹患

- ・日本の小児人口 約1700万人～1700人/年
- ・宮城県の小児人口 約32万人～32人/年

小児がんは、大人のがんに比べ非常に稀な疾患

3

小児がんの種類

1. 白血病(約35%)
2. 脳腫瘍(約20%)
3. 神経芽腫(約14%)
4. その他(リンパ腫、網膜芽細胞腫、他)

小児がんの種類は、大人とは全く異なる

4

小児がんの予後

- 予後
 - 1975年に診断された症例の5年生存率 59.9%
 - 2003年に診断された症例の5年生存率 83.3%
- 小児がん経験者
 - 全国 約10万人存在
 - 宮城県 約1800人

長期生存するお子さんのほうが多い

5

「小児」ががんに罹ること

- 治療のための長い入院
 - 両親の付き添い
 - 兄弟関係
 - 学校や友人関係
 - お金
- 治癒後の長い人生

6

小児がん経験者の晩期障害

- 成長障害～身長・体重の増加不良
- 生殖機能障害～無精子症、不妊症、早期閉経
- 中枢神経障害～てんかん、知的障害、など
- 心機能障害～特定の化学療法剤
- 二次がん～放射線・化学治療による新たながん

約半数の小児がん経験者がなんらかの晩期障害を経験する

7

小児がん経験者の就労

- アンケート調査
 - 33名/165名(20%)は、未就労
 - この33名中22名は、晩期障害あり

8

小児がんを取り巻く問題点

1. 稀少疾患のため各病院の症例数が少ない
2. 治療中の家庭、教育、経済環境など総合的な支援体制
3. 晩期障害を克服し、社会生活を営んでもらうための支援体制

9

小児がん拠点病院 ～東北大学病院は2013年3月に指定～

小児がん拠点病院



全国で15施設

東北地区小児がん拠点病院

- 東北大学病院と宮城県立こども病院が連携して診療
- 東北大学病院は造血器及び固形腫瘍の両方、こども病院は主に造血器腫瘍
- 隣接県(岩手、山形、福島)から、年間約5～10症例を受け入れ
- 再発・難治症例は、全体の約20%

11

東北地区小児がん拠点病院の診療実績

初発症例数(再発・難治例)		平成21年	平成22年	平成23年
造血器腫瘍	東北大学病院	11(2)	10(2)	15(2)
	宮城県立こども病院	12(3)	15(4)	13(3)
	計	23(5)	25(6)	28(5)
固形腫瘍	東北大学病院	23(5)	30(8)	21(6)
	宮城県立こども病院(良性のみ)	3(0)	3(0)	5(0)
	計	26(5)	33(8)	26(6)
総計		49(10)	58(14)	54(11)

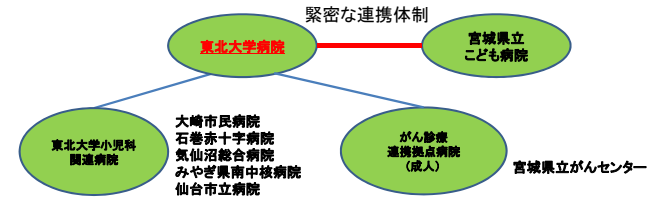
12

東北大学病院における小児がん診療



13

宮城県における小児がん診療

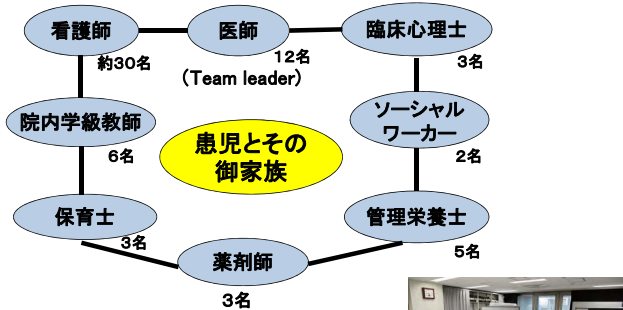


東北大学病院で長期フォローアップが困難な場合には、

- ・御家族の居住地域や御希望に沿って小児がん診療病院と連携
- ・JPLSG長期フォローアップ委員会による長期FU手帳、治療サマリーシートの活用
- ・どこでもMY病院構想による臨床情報の共有

14

小児がん診療にはチーム医療が不可欠



活動

- 週1回、小児がん総合カンファレンスの開催(多職種間)
- 小児がん患児全症例の臨床情報の共有
- 小児がん患児のトータルケアについての検討



小児がん総合カンファレンス

15

東北大学病院に「小児腫瘍センター」を設置

病床個室化と区域クリーン化

- ・家族空間の確保
- ・兄弟関係の改善
- ・免疫不全状態の遊び場の確保

ケアスタッフの充実

- ・チャイルドライフ・スペシャリストの導入
- ・臨床心理士、メディカル・ソーシャル・ワーカーの強化
- ・緩和医療科との連携強化

診療ユニットの導入による診療科連携

- ・白血病、脳腫瘍、固形腫瘍の各ユニット

16